

足立晶子歌集『はれひめ』（砂子屋書房）

奥田亡羊

体感・時間・共振

足立晶子の第五歌集である。

この歌集の目立った特徴として、歌の間に短い四つの散文を挟み込んだ構成がある。長年わざらつている糖尿病、故郷の静岡三島の水、十一歳の時に死に別れた父の声、そしてパタゴニアに吹く烈風。文章が歌人の輪郭を明確にし、短歌作品への橋掛かりとして効果的な役割を果たしている。

さて、足立晶子の歌の魅力をどう書けばいいだろう。捉えようとすればするほど逃げていく。まるで瓢鮎団の漁師になつたような楽しさを味わいながら、私は足立短歌と向き合ってきた。

・夕焼けで電線の鳥に気づきたり空の濃くなり一羽の去りぬ
・夕焼けの中より雷鳴聞こえくる数へるほどの雨粒落ちて
・ねむの木の幹覆ひゆく雫はなほ枝先狙ふ

植物である

まず巻頭の三首。ここからすでに足立晶子の世界が始まっている。一首目の内容は読んでその通り。夕焼けて電線の鳥に気づく。空が濃くなり一羽が去る。だが空の変化と鳥の因果関係は薄く、むしろ作者の生な認識を手渡される感じがする。二首目は感覚が開かれていて、夕焼けと雷鳴と雨粒が一度に来る印象だ。三首目は結句「植物である」に眩暈を覚えている。植物であることは鳥を見たときにわかつてゐるからだ。薦の這う勢いに植物の命を再認識したのだろう。しかし、本当に迫力があるのは、足立の認識、その驚きの強さである。

さらに見てゆこう。

- ・青葡萄青栗青柿真夏日をはじいてゐるよ
われも彈かる
- ・青葉梟はボスカスと鳴くと言ひし母口中
にボスカスと言ひて聞く
- ・どうだろう、この身体性は。真夏日や青葉梟の鳴き声を共有しながら、植物の実や他界した母と一体化している。
- ・だしぬけに蟻動きだすノートの上辛抱込
きよみがへりかな

・さくら見てさくら見てなほ眼裏のまつか
な色は藪椿かな

対象を引き寄せる力もすごい。ノートの上の蟻を、桜の奥の藪椿の記憶を、眼と心で対象にのめり込むように掴み取る。

そして時間の捉え方。

・わが汗に従いて来たるか蚊の羽音水引草
を切りたる間なり

・残りぬし柿の実ひとつ今朝は無し「あつ」と小さく言ひて落ちしか

・その辺りびつしよりにして水飛ばす浅蜊
の元気を食べてしまひぬ

過去と現在の別があるようで無い。過去を引き寄せ、そのまま現在に重ねている。足立の歌はすべてが同時なのである。

・遠ざくら見つ歩みて丘の上 夕ざくら
なり風の出でくる

してわれもまだゐる

遠く見ていた桜は、近づくとともに夕桜となり自己に同化する。ホホジロとも一体化し、やがて去るであろう自分の姿をそこに見ていく。世界への親和力、身体的同化と共振こそが足立晶子の短歌なのだ。